

南の大地から北の大地へ～日本人建築家によるワークショップ～

2018年6月

在ウルグアイ日本国大使館 大泉 美音

日本から見るとまさに「地球の反対側」に位置する最遠隔国ウルグアイは、国民約340万人に対し、牛約1200万頭、羊約800万頭が暮らす農牧大国です。地平線まで広がるなだらかな草原で動物たちが自由に草を食む風景は、どこか北海道を想起させます。

2018年4月、ウルグアイ共和国大学の招へいで、北海道出身の建築家・塚田眞樹氏がウルグアイを訪問し、ワークショップと講演会を実施しました。塚田氏とウルグアイの縁が生まれたのは、共和国大学建築学部(FADU)の学生たちが卒業前に8ヶ月かけて世界中を回る修学旅行がきっかけです。

2016年、塚田氏は修学旅行中の学生たちをアトリエに迎え、日本の建築や自身の作品について意見交換を行いました。都市部の複雑な条件下の土地を最大限活用し、いかに豊かな空間を作り出すのか。塚田氏の作品の中にちりばめられた創造的な提案や周辺環境への配慮は、遠くウルグアイから訪れた学生たちを驚かせ、魅了しました。その後も交流が続き、FADUの2018年度前期開講基調講演のため、ウルグアイに招かれることが決定しました。

講演会と併せ実施したワークショップで塚田氏が指定した課題は、人口減少が進む北海道のある自治体で廃校となることが決まっている小学校を宿泊施設として再活用するという実在する構想を題材としたものです。小学校の校舎はそのまま残しつつ、校庭や駐車場等の敷地部分に魅力的なランドスケープを作り出すことが今回の課題です。本構想は、この小学校を観光資源として生まれ変わらせることで地域経済を活性化することを目指しています。



塚田氏とワークショップ参加者

ウルグアイは小国ながら、一人あたりGNI, 民主主義指数, 繁栄指数, 法治国家度指数や政治・経済改革指標等、複数の国際指標で中南米1位の評価を得ています。社会的に成熟しているウルグアイでは、2010年以降の前年比人口増加率はわずか0.3%、2017年の出生率は1.71%まで減少しています。農村の一部には、高齢化と人口減少による過疎に悩む地域が存在し、観光振興や産業の誘致など、いかに町を再活性化するかが課題となっています。実は、「人口減少・過疎」は、遠く離れた両国がともに抱える問題なのです。

今回のワークショップでは、日本とウルグアイに共通する「人口減少・過疎」という問題を切り口に、FADUの若手講師、研究者、在学生ら28名が5グループに別れ、それぞれ熱心に課題に取り組みました。塚田氏が重視したのは、①美しい景色が広がり、②この場所で過ごしたひとときが記憶に残り、③アクティビティを誘発し地域を活性化しうるデザインとすることです。

最初に視界に入る外観は、訪問客の第一印象を決定づける重要なポイントです。景観デザインの大前提としてその場所を熟知する必要がありますが、今回のワークショップで参加者たちを悩ませたのは、北海道の厳しい寒さでした。南半球で日本と同じ緯度に位置するウルグアイは四季がありますが、雪は降りません。一方、プロジェクトサイトの冬の積雪量は1m以上。景観デザインを検討する際、夏と冬では全く表情が異なることを所与の条件として考慮する必要があります。加えて、気候の違いによりその場所で育つ植物の種類も違えば、同じ樹木であっても高さや形状が異なります。参加者らは雪国についてリサーチを行い、雪が深い季節でも利用でき、一年を通じて美しいデザインづくりを熟考しました。



参加者らのノート

宿泊施設という主により外部からの訪問客を想定しますが、塚田氏は、幅広い年齢層の人々が気軽に立ち寄ることができ、地域の内外や世代をこえて交流できる場所となるデザインとすることを強調しました。プロジェクトサイトである小学校は、多くの住民の母校であり、思い出が詰まった大切な場所です。廃校となった後も他の目的でこの場所を訪問できることは、住民にとって大きな意味があります。観光資源としてだけでなく、地域の人々のつながり強化によるコミュニティの活性化も、本プロジェクトで期待される効果の一つです。参加者らは、プロジェクトサイト周辺の公共施設の分布を調べ、地域の風習や季節毎の祭事を研究し、「地域住民にとって魅力的である」ものは何かを議論しました。

4日間のワークショップでは、「提案」と言える完成度には至りませんでした。連日充実した議論が行われました。「なぜこの素材を使うのか」「なぜこの寸法が良いのか」「なぜこの配置なのか」。塚田氏のプロの建築家の視点からの問いかけに、参加者らは、一見感覚的に思える「デザイン」というものが、実はしっかりとした理由や機能性に裏付けられたものでなければならないという厳しい現実を目の当たりにしました。

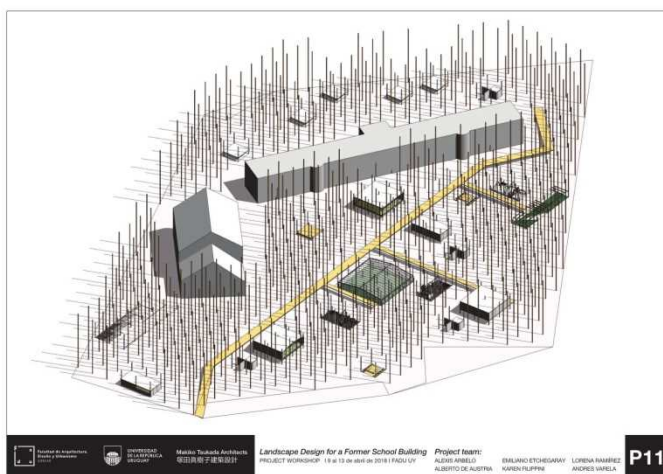
同時に、ウルグアイ人の視点から本プロジェクトをデザインすることにも大きな意義がありました。ウルグアイ人は、家族や友人とともに過ごす時間を何よりも大切に、「みんなで心地よく過ごすこと」を好みます。いずれのプロジェクトも、緑や水があるこ

と、座ってくつろぐことができる空間があること、子どもと一緒に過ごせることなど、シンプルな「心地よさ」を慈しむウルグアイ人らしさがしっかりと反映されていました。大きな観光資源がない地域にとって、滞在の「心地よさ」は最大の魅力の一つです。物珍しいオブジェを作って関心を引かずとも、居心地のよい空間を作ることで人々が集まり、地域振興につながる可能性があることに気づかされました。

最後に、各グループのデザイン案を紹介します。

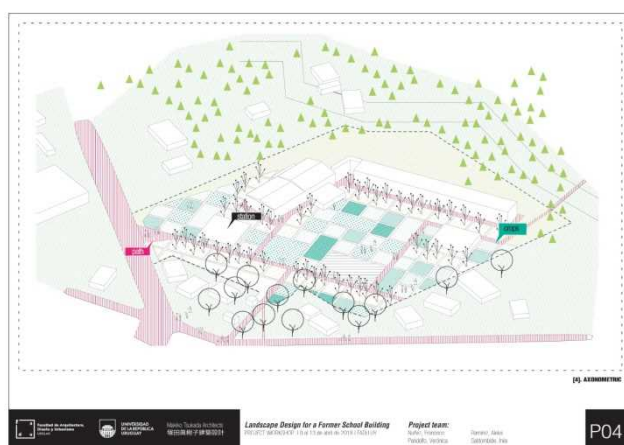
グループ1: グリッドに沿って

公道に平行な線とそれに直行する線を5m毎に引き、交差点に高さのある落葉樹を植えることで、整然としたグリッドのラインを作り出します。その中に、利用する季節に応じて高低差を付けた目的別パビリオン(茶室、温泉、植物園、キッズコーナー等)をグリッドに沿って配置することで、樹木が作り出す垂直性とパビリオンの幾何学な水平性が重なり合う景観を提案しました。パビリオンは、入り口に近いほど公共性の高いもの、宿泊棟に近いほどより親密さ(宿泊者向け)となるように配置されています。



グループ2: 作る・収穫する・食べる

敷地をブロックに分け、季節毎に農作物を栽培し、収穫した野菜や果物を食べることができる体験型の施設を提案しました。植物のパッチワークのようなカラフルな景観の中に、ワークショップ用の施設や農作物のテイスティングを行う調理スペースが点在し、栽培から消費まで、植物のサイクルを一通り体験することができる施設です。一変、真冬になると真っ白な雪景色の中に木々とパビリオンだけが存在する、シンプルな景観に変わります。冬の間も施設で栽培された農作物を楽しめるよう、貯蔵庫もしっかりと用意されています。



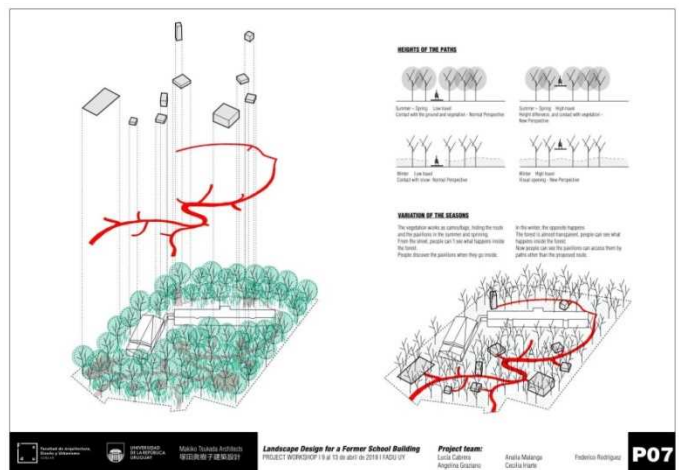
グループ3:池を作る

校庭のグラウンド部分に大きな池を作り、その周辺部を高低差のあるデッキで囲います。デッキは、公道と宿泊棟、そして裏山をつなぐ小道になると同時に、カフェや展望台として活用されます。デッキ沿いのフェンスをつる性の植物で覆い、彩りを加えます。夏は緑に囲まれた空間で散歩やボートを楽しみ、冬は凍結した氷面を活かしてスケートリンクを作ります。幅広い年齢層がそれぞれの楽しみ方をできる空間作りを目指しました。



グループ4:森を広げる

プロジェクトサイトの裏山にある森を施設内まで広げ、森の一部としてしまう提案です。木々の間隔等で暗示された道を進むと茶室や温泉、展望台があり、森の中に隠れているアクティビティを探しに行くような、冒険心を掻き立てるデザインです。



グループ5:町中にアートを

プロジェクトサイト内に目的別(花見、カフェ等)のオブジェを作り、更に町の堤防や森など5カ所にも同じ材質のオブジェを設置します。美しい景観が町の各所に広がり、芸術が地域に浸透することで、本プロジェクトがサイト内のみならず町全体に裨益するよう期待が込められています。

